

第4分科会報告

指導者 加登田 恵子

第4分科会では、「新しい子ども会のカタチ～みんな違って、みんないい～」をテーマに掲げました。

21世紀になって四半世紀。急速な「少子化や家族関係の変化など、子育て環境が急速に変化するなか、果たして今後「子ども会活動」は生き残れるのかという危機感が漏らされる様になって久しくなります。地域で熱心に活動をされている皆さんほど、自分たちは「絶滅危惧種」になるにではという、冗談めいた本音もこぼされる様な状況です。そこで、今回の分科会では、そういった社会の変化に立ちすくみ、ただ嘆くだけでなく、逆に我々自身が従来の決まりごとや発想を打ち破り、「新しい子ども会」のあり方について考えていこう、という大胆な問題提起として、テーマを設定しました。

もちろん、今回の分科会で結論が出るわけではありません。しかし、たとえ小さな思いつきでも、試しにやってみたことでもヒントを持ち寄って、「これからの子ども会」を創ろうという「心意気」で臨みました！

サブタイトルの「みんな違って、みんないい」は、皆さんご存知のように山口の童謡詩人金子みすずの言葉です。さすが、他県からの参加者も皆ご存知でした。

ただし、誤解なきように付け加えますと、「子ども会活動」は何でも有りだ「みんな違って、みんなバラバラ、好き勝手」で良いのでは？という提案ではありません。子ども会活動の核心部分を守るために、時代の変化や各地域の事情に合わせて、出来るだけ自由に、小さなことから、勇気を持って、その地域に合わせたやり方を工夫していこう！という意味を込めました。

さて子ども会活動は、戦後のベビーブームの時代に生まれ、その後、目覚ましく発展してきました。地域の母体となる自治会や行政との関係づくりが定型化し、ジュニアリーダーなどの人材養成システムや組織体制が形作られてきました。

しかしその一方で、歴史が長くなるにつれて、決まり事が形骸化している地域もあります。例えば、毎年小学校の高学年の保護者会で、PTA 役員と子ども会役員が機械的にくじで振り当てられ、当たった保護者は、クリスマス会と新入生歓迎会等の決

まりきった行事を、まるでノルマをこなせば通り過ぎていく「形だけ子ども会」も蔓延しているのも事実です。

子ども会役員のなり手がなく、と辛苦している地域がほとんどです。しかし、その一方で、現役の子育て世代からすると、共働き世帯が当たり前となり、ひとり親世帯もかなりの割合を占める昨今では、親も世話人になる余裕がない方が多いのです。役員の番が来たので、「子ども会から脱退させる」と言う声も聞かれます。

本来、子ども会活動は、地域で「ワクワク楽しい」ことを実行することで、子どもたちは大喜びし、それを世話する大人たちも、親同士の繋がりを楽しみ、成長する子どもたちを見て元気を貰う、それが最も意義ある子育て経験だと思います。しかし、まるで「使役」扱いされるのは、とても残念なことです。

組織運営の在り方や活動形態を工夫する事、つまり「新しい、子ども会活動」を作っていくことが必要ではないでしょうか？

今回、第4分科会では、柳井市子連から平原幸憲さん、阿武町子連から高井一さんのお二人が話題提供してくださいました。

平原さんは、とても斬新なご提案がてんこ盛りでした。まずは新しい運営方法の紹介で、私なりにまとめますと3つあります。①特定の活動ごとの子ども会を認めること（合唱団を中心としたバンビ子ども会、防災活動を中心としたこども会など）次は②自治会ごとの子ども会の枠を外すこと（小さな子ども会の柔軟な合併、小学校区の子ども会の結成など）、最後は、③保護者以外の有志世話人を募ること（子ども会 OG に世話人をお願いするなど）。

もう一つは、魅力ある、楽しい子ども会活動に向けての提案です。①外部団体とのコラボレーション（B&G 海洋センターとのコラボによるカヌー体験）、②市子連が遊び道具を管理し、体験や貸し出し活動をする（ボッチャ、ラダーゲッター、モルックなど）、③市レベル行事への個人参加の機会の創出（市子連による子ども神輿の主催など）。単子を支える「市子連」の役割について考える、良い刺激になりました。

高井さんは、過疎地域の小さな子ども会活動で、伝統行事（神楽）を伝承しておられる実践例の紹介でした。この地域では、子ども会会員5～6人という極小子ども会でも、親子が中心となり、楽しく、元気に地域文化を守る活動ができるという好事例でした。この神楽子ども会を、県内各地の子ども会が招いて、各地で神楽体験をしてみる何ていう活動に広がっても面白いな、と思いました。

最後の意見交換でも、現代の地域活動の難しさに直面されている悩みが話し合われ、それに対して励ましのアドバイスもありました。参加された皆さんが共通して、「何とか、子ども会活動の魅力を引き継いでいきたいね」という暖かい思いを共有し育成者として仲間なのだとことを確認できた、とても良い分科会になったと感謝しています。ありがとうございました。